SSIS 秋季研修旅行 2019(報告)

“晩秋のモスクワ・サンクトペテルブルグへの旅”　　SSIS文化活動委員会

SSIS 秋季研修旅行 2019 は、ロシアの首都モスクワと“北のヴェニス”と呼ばれ美しい街並みが世界遺産とされているサンクトペテルベルグを訪問した。

ここ数年、女性の参加が増加して今年も 9 人を数える華やかさで総勢 20 名が参加して、エルミタージュ美術館、エカテリーナ宮殿、赤の広場、クレムリンなどの名所を観光したほか、サンクトペテルベルグではマリィンスキー劇場でバレーを観劇、モスクワでは豊田通商(株)のご厚意でロシアのシリコン・バレーと呼ばれる“スコルボ・イノベーション・センター(Sk)”を見学・研修することができた。

サンクトペテルベルグは北緯 59 度で夏至の頃は白夜も臨めるが、晩秋の 10 月は太陽が恋しく、直前の天気予報でも連日の小雨、モスクワでも曇りだったが、皆さんの日頃の行いのお蔭で小雨交じりの日はあったものの青空も見えての気温も 14、5 度の旅行日和が続いてツアーを楽しむことができた。

内山佳美さんの音頭で“晩秋のロシア旅行”のタイトルで全員 LINE で写真収集することになった。

サンクトペテルベルグでのガイドは女性のアナスタシア(ナスチャ)、ホテルは市心のモスクワ大通りに面した ホテル「オクチャブリスカヤ」Hotel Oktyabrskay 、モスクワのガイドは男性のアナトリー、ホテルは市心の東北のホテル「ベスト・ウエスターン・ヴェガ」Hotel Best Western Vega であった。

記

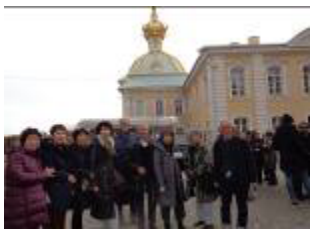
日程; 2019 年 10 月 10 日(木)～16 日(水)
(モスクワ・サンクトペテルブルグ 7 日間)

出席者;(順不同、敬称略)
青木昭明・礼子、池野成雄・富士江、内山佳美、
栗原啓志郎・知恵子、松本光由、三宅信弘、
真鍋研司・しのぶ、福田 弘、石川静香・則子、
内山雅博・ちよの、野澤滋為・恭子、
島 亨・恵子、(20 名)

第 1 日; 10/10(木)
成田空港第 2 ターミナル国際線ロビー集合、JL7171 便でモスクワへ出発、モスクワ・ドモジェドボ空港で入国審査の後、JL7171 便(S7 航空共同運航)に乗り換えペテルブルグ・プールコヴォ空港へ到着、南北へ延びるモスクワ大通りを北上してホテルへ直行、チェックインして、レストランで遅い夕食をした。

第 2 日; 10/11(金)
ホテルからバスで出発して午前中は、市の西郊外 30km 近くの “ペテルゴフ宮殿” を観光、

「ペテルゴフ宮殿 (ピョートル大帝の“夏の宮殿”)」
バルト海、フィンランド湾に面して、北方戦争の戦勝記念として 1741 年にピョートル大帝がヴェルサイユ宮殿を模して建築した。豪華な大宮殿、モンプレジール宮殿、マリ宮殿、広大な庭園にはサムソン大噴水はじめ趣向を凝らした 150 近い噴水がある広大な庭園を、ぱらぱらと小雨の中を一同は散策して楽しんだ。　　憎まれ役のカラスもロシアでは名物の“黒白のツートーンカラー”で愛嬌あるように見えたのはボクだけだろうか。



近くのレストラン“Kladovaya(クラドヴァヤ)”にて昼食、午後は “エルミタージュ美術館“ を見学、

「エルミタージュ美術館」

“エルミタージュ美術館“は冬宮、小エルミタージュ、旧エルミタージュ、新エルミタージュの4棟からなり連続して見学した。

ネヴァ川からの美術館の威容と、宮殿広場からみる美術館の全体像は目に焼き付いている。

エルミタージュ美術館は世界最大級の美術館であり、その素晴らしさは我々の目を奪うものであった。

壮大な建築アンサンブル、世界文化と美術に名作の数々、皇帝の宮殿の誕生、全盛期そして終焉への歴史、破壊と修復からその後の文化財の維持に感服している。

因みに、美術館の語源“エルミタージュ“はフランス語で”隠れ家“を示すという。

今回の研修旅行のハイライトで見学に 4 時間を当てていて、ガイドさんの丁寧な案内で見て廻った。

疲れて小休止していたところ、ガイドさんに電話がかかってきた。

「ライトアップされたネヴァ川運河クルージング船に乗らないか？」

予約の客がキャンセルしたらしい。7 人が手を挙げた。

美術館巡りを短縮してレストランを前倒しにできるならボク達も参加したいところだったが時間がずれるだけというので疲労困憊で断念した。

今回の旅行の“残念”は本件だけである。

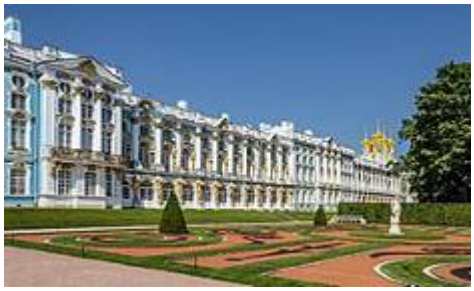
―王座の前で―

美術館見学後、レストラン ”Demidov(デミドフフ)“ に入ったが、金曜日の夜とて大勢の先客がいて、芸人がバラライカを弾き 2 人の踊り子が踊っていた。

第 3 日； 10/12(土)

ホテルからバスで出発して午前中は市の南郊外 25km にある “エカテリーナ宮殿”見学

「エカテリーナ宮殿」



プーシキンが学んだことでも有名な貴族の学校がある貴族の別荘地で、1750 年代に建てられた代表的なバロッ

ク建築、第 2 次大戦でドイツ軍に爆撃されたが美しく修復された。大黒屋光太夫がエカテリーナ 2 世に帰国を願いでて謁見したことで知られている。

レストラン **“Yaltal(ヤルタ)”** にて昼食後、午後はペトロバヴロフスク要塞など市内観光をしたが、ネヴァ川はかなり増水していた。

「マリィンスキー劇場」 にてバレー **”La Sylphide (ラ・シルフィード)“** を観賞、バレーとともに劇場内外の雰囲気を楽しんだ。

幕間でのワインを楽しもうと 2 階へ向かったが長蛇の列で断念した。バレー鑑賞の雰囲気のまま レストラン **”Suarel(スアレル)“** にて遅い夕食を摂った。

第 4 日； 10/13(日)

ペテルブルグの地下鉄メトロは数 10mの深度を通っているという。ホテルから徒歩で宮殿のような「プローシャチ・ヴォスターニヤ」駅へ出かけて、全員が切符を買って次の駅までの一往復の乗車経験をした。

午前中は、**“イサク聖堂” “カザン大聖堂” “ハリストス正教会(血の上の救世主教会)” “ネフスキー通り”**などの市内観光をしてレストラン**“Sankt Petersburg”**にて昼食後にネフスキー大通りをモスクワ駅へ向かった。

モスクワ駅から 14:10 発モスクワ行き“サプサン号 767A”に乗車してロシア鉄道を経験して、18:07 モスクワ・レニングラード駅へ到着、ホテルへチェックイン、中国人が多い。ホテルのレストランで皆さんゆっくりと歓談しながら夕食を摂った。カフェテリア方式だが品数も内容も悪くない。

第 5 日； 10/14(月)

ホテルを出て都心に向かい、ボリショイ劇場を眺めながらモスクワ西南にあるロシアのシリコン・バレーと呼ばれる“Skolkovo Innovation Centr(Sk)”に研修のため向かう。

「Skolkovo Innovation Centr(Sk)」

豊田通商ロシア栗原社長の総合司会と、スコルコフ・ファウンデーションの国際担当ディレクターのロマノフさんのガイドで、スーティン副社長ほか 5 つの講演とパナソニックの “AgroLab” を含む研究施設の見学があり、活発な質疑応答もあり有益な研修となった。

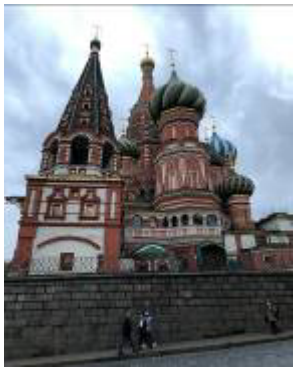
モスクワ川の湾曲部にある修道院群は、モスクワの要塞の役割を果たしていて、帰途、チェーホフ、ゴーゴリ、ツルゲーネフなど著名人の墓地があるノヴォテヴィチ女子修道院があった。 レストラン**“Zhiguli(ジグリ)”** で昼食後にモスクワ大学の近くのモスクワを見渡せる“ヴァラビヨーヴィ丘”へ出かけた。ショッピングなど市内見物して、**「赤の広場」**へ向かいライトアップされた**“レーニン廟” “聖ワシーリー寺院” “グム百貨店”**をゆっくりと散策して、近くのレストラン**“Chanahi(シャナイ)”**で夕食した。

― クレムリンを囲む高い赤壁―

第 6 日； 10/15(火)

午前中は、赤の広場、クレムリンへ入場して教会を見物して武器庫・博物館を見物した。

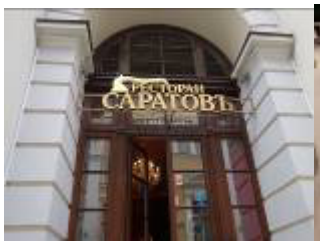
「クレムリンと赤の広場」の見学



前日からのモスクワ見物で随所に高くそびえる尖塔とともに赤い高い城壁に囲まれたクレムリンへ入場した。

一部修築中とはいえ大勢の見物客と同じように聖堂広場の周りにある豪華な建物を見物した。

“アルハンゲルスキー聖堂”“イワン大帝の鐘楼“ “ウスペンスキー大聖堂”“大クレムリン宮殿”“パトリアーシェ宮殿”“リザパラジェーニヤ教会”、イワン 1 世が建てた**“ウスペンスキー大聖堂”**では教会の中に入りイワン雷帝の玉座、双頭の鷲を抱く皇后の御座を見学したが、最後に“武器庫・博物館”見物では疲れ果てた。



レストラン**“Saratov（サラトヴィ）”**で昼食後にモスクワ・ドモジェドボ空港から 17:15 発 JL422 便で東京へ、

第 7 日； 10/16(水)

8:35 成田国際空港着、解散

あとがき

SSIS 秋季研修旅行は近国が一段落したことからミャンマー、スリランカを経て、今年は、ヨーロッパ・ロシアのサンクトペテルベルグ、モスクワまで足を延ばすとともに、9 人を数える女性の参加でバレー観劇、世界遺産見学、観光名所を見学という文化活動に直結した訪問とした。さらにモスクワでは豊田通商(殿)のご尽力で“スコルボ・イノベーション・センター”を見学・研修することができた。

ボク自身は3度目の当地訪問ではあったが、“ロマノフ王朝”をはじめ輝かしいロシア文化に圧倒された1週間であり、観光地・レストランの時間厳守が厳しく、ガイドさんの活躍、豪華にライトアップされたサンクトペテルブルグ、モスクワの繁華街を見るにつけ、その夜歩きを楽しんでみたかったと思うのはボクだけだったであろうか。

（文責　島　亨）